

障害者「親が介護」9割、介護者の高齢化深刻

自宅で家族の介護を受けている障害者の9割が親に頼っていることが、障害者団体の調査で明らかになった。介護者の過半数は60歳以上で、障害者を支える側の高齢化が深刻になっている。こうした実態を全国規模で調べるのは初めて。

調査は、障害者が働く小規模作業所などが加盟する「きょうされん」が2010年7月、3万2,573人の障害者を対象に実施。親やきょうだいなどの介護者にも記入を求め、3,277人の障害者と4,123人の介護者から回答を得た。

主な介護者のうち、母親が64.2%と3分の2近くを占め、次いで父親が25.4%だった。年齢別では60代が33.6%と最も多い。60歳以上は過半数の53.1%に上った。

東京都の93歳の母親が、身体・知的障害がある

72歳の息子と2人暮らしをしている事例や、静岡県94歳の父親が58歳の精神障害のある娘を介護している事例もあった。介護者の半数近くは居宅支援サービスを利用せず、70代の介護者の利用率は13.7%、80歳以上は3.1%と低い。こうしたなか、介護者の84.5%は負担感を感じている。とくに精神的負担が68.7%と最も多く、身体的負担の52.0%、経済的負担の40.8%と続く。調査には、「障害や症状が重くなり、親が支えきれない」、「親亡き後の生活を考えると不安」などの懸念が寄せられた。

調査結果について、きょうされんは「障害者とその家族の状況に応じた支援ができる制度改革が急務だ」と指摘している。

(森本美紀)

(朝日新聞・東京 2010年12月5日)